

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

しりあがり寿 漫画家

Siriagari Kotobuki / Manga Artist



CREATOR^{No} INTERVIEW 115

しりあがり寿 Shiriagari Kotobuki

1958年生まれ。多摩美術大学を経てビール会社勤務の傍ら、1985年『エレキな春』で漫画家としてデビュー。1994年退社。2000年『時事おやじ2000』（アスペクト）と『ゆるゆるオヤジ』（文藝春秋）で文藝春秋漫画賞、2001年『弥次喜多 in DEEP』（エンターブレイン）で手塚治虫文化賞優秀賞を受賞。2002年から朝日新聞・夕刊で『地球防衛家のヒトビト』を連載。ギャグから社会派まで幅広いジャンルの漫画作品を手がける一方、映像、現代アートなど多方面で活躍。2014年、紫綬褒章受章。



No

115

しりあがり寿 漫画家

SHIRIAGARI KOTOBUKI / Manga Artist

間違っても、やらかしても
「いろいろあるよね」と思った方が楽しい。

クリエイターインタビュー

『ネットでは経験できない混沌を、大スケールの飲み会で実現』

published_2020.04.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

ゆるくて、シュールなサブカル的マインドを持ち続けながら、広い層に向けて日々漫画を発信しているしりあがり寿さん。国立新美術館で開催予定の『古典 × 現代 2020—時空を超える日本のアート』では、あまりにも有名な葛飾北斎の「富嶽三十六景」のパロディ『ちょっと可笑しなほぼ三十六景』シリーズを発表します。今回の作品に限らず、ちょっと可笑しくてじわじわくる、それでいて油断しているとスパッと斬り込むような作風は、どのようにして生まれたのでしょうか。パロディや北斎への思いから、ギャグ漫画とアートの関係、そして昨今の社会情勢について、縦横無尽に語ります。

ものの見方がユーモアに溢れ、サービス精神旺盛な北斎。

若い頃からパロディが大好きだったんです。デビューしたての頃は、他人の絵柄を真似した漫画ばかり描いて、毎回絵柄が違ってもその人らしさが残るんだったら、それが本当の個性なんだって偉そうなことを言ってたくらい。世代的にもピククリハウスやモンティ・パイソンの影響を受けたんだけど、北斎と遊ばせてくれるっていうから、これはもうパロディだろうと思ってね。だってパロディって、元を知らないと成立しないじゃないですか。その点、北斎の絵は世界中で知られているでしょ。ルノワールとどっちが有名だよってくらい そんなことはないかな(笑)。まあとにかく、そのくらい知られている作品のパロディができる。しかも今は、便利なフォトショップもあるってことでやってみたら、本当に面白くてね。最初は10枚くらいしか制作しないつもりだったんだけど、全部やろうと思ったら、36枚じゃなくて46枚もあってびっくりしました。北斎の絵は、おそらくパロディにしやすいんでしょうね。造形的にどれも印象に残るから、ひっくり返したくなる対象みたいなのがはっきりしている。あとはやっぱり北斎漫画を見ると、あのエネルギーは参考になります。

もともと古典美術に関しては、現実的なものよりファンタジーというか、不思議なもののほうが好きでした。日本だったら妖怪みたいなやつとかね。日本の妖怪って愛嬌があって、そんなに怖くないじゃないですか。北斎は、人を面白がらせてやろう、驚かせてやろうっていうサービス精神がありますよね。でっかいだるまの絵なんて、まさにそう。しかももの見方がユーモアに溢れている。お侍だからといって描く方がかしまるわけでもなく、いかにも偉そうに描いたりして、あるがままに飄々とらえているでしょ。あの軽さというか、こだわりのなさは、すごく好きです。



古典 × 現代 2000—時空を超える日本のアート

古い時代の美術と現代美術を組み合わせ、日本のアートの魅力を新たな視点で見つめ直す展覧会。主題や造形の類似のみならず、先達から得た着想や、誰もが知る名品とそのパロディ、古典作品を取り込んだインスタレーションなどを展示。花鳥画 × 川内倫子、刀剣 × 鴻池朋子、北斎 × しりあがり寿、仙厓 × 菅木志雄、円空 × 棚田康司、仏像 × 田根剛、乾山 × 皆川明、蕭白 × 横尾忠則という組み合わせで、古典と現代あわせて出品総点数は、約 200 点。2020 年 6 月 1 日(月)まで国立新美術館で開催予定。

ちょっとだけ変えるからかっこいい、面白い。

『ちょっと可笑しなほほ三十六景』というタイトルにしたのは、「ちょっとだけ」変えたかったから。元の絵をいっぱい変えたら何とでもなっちゃうけど、1箇所を変えるだけで全然違う意味になったり、どこを変えたのかわからないくらいの方がかっこいいと思うんですよね。柔道とかでもさ、気づかないくらいの技をふっとかけて、相手ごろんと転んだりするのってかっこいいじゃないですか。たとえば、《太陽から見た地球》は、本当にちょっと変えただけ。色を変えて富士山を地球にただけで、いきなり引いた感じがする。神奈川県から太陽系まで行っちゃった。



《太陽から見た地球》

富嶽三十六景の中でも特に有名な《神奈川沖浪裏》のパロディ。

しりあがり寿《ちょっと可笑しなほほ三十六景 太陽から見た地球》2017年 作家蔵

展示期間：5月8日～6月1日

《一葛飾北斎一天地創造 from 四畳半》というアニメーションもつくったのですが、北斎は最後まで四畳半の空間で絵を描いていた人。四畳半って、ほんとに狭いですよ。けどそこで描いているものは、とてつもなく広くて巨大で、森羅万象をとらえていた。それが北斎のすごさだし、あるいは描くってことのとてつもない例だと思うんです。四畳半で筆一本あれば、いくら巨大なものでも表現できちゃうっていうね。北斎はきっとグルメでもなかっただろうし、ファッションも気を使ってなさそうだし、片付けすら面倒くさくてどんどん引っ越してたくらいでしょ。旅行は好きだったみたいだけど、本当に描くことだけをしていた。筆と紙さえ与えておけばあんなことができると思うと、今が贅沢すぎるというか、ちょっと見習わないといけない気がしますよね。だからアニメでは、四畳半っていうミニマムなところから、いかに巨大なものをつくったかを表現したかったんです。僕にとっては、ちょっとわかりやすすぎたかな(笑)。



《一葛飾北斎一天地創造 from 四畳半》

展示会場で上映される、しりあがりさんが監督したアニメーション。筆を握る北斎が四畳半を軽やかに飛び出して踊る姿などを通して、四畳半の空間と、北斎が描いた世界観を対照的に表現。しりあがりさんのお気に入り、ラストのシーン。ぜひ会場で確認を。

ギャグ漫画とアートが重なるところ。

ひとことでギャグ漫画といっても、いろいろありますよね。アートはもっと大きな枠組みだけど、ギャグとアートはちょっとだけ接するところがある気がします。常識を覆す驚きというか、既成概念ではとらえられない何かを世の中に提示するっていう部分で、一瞬重なる気がしてそこが好きなのかな。人を元気づけたり、慰めたりするような温かいギャグ漫画もあるけど、僕はもうちょっと「そんなのありかよ」とか「そこでこう来るか」みたいなことに重きを置いていたりします。同じようにアートも、宮殿に飾るような豪華なものもあるけれど、「え、何これ？」と常識を覆すようなものもある。後者の部分で重なればいいなと思っています。

いずれにしても一番大切なのは、答えはひとつじゃないってこと。今回の展示は、現代と古典のいろんな組み合わせがありますけど、別にそれが正解なわけではないじゃないですか。いろんな可能性のうちのひとつをたまたま提示しているだけで、ほかにもこの人とこの作品を組ませたらもっと面白いかもしれないっていう答えが、いくつもあるはず。だから日本美術も単純に答えはこうっていうんじゃなくて、いろんなつながりや共通点を想像すると面白いと思います。



しりあがり寿 漫画家

SHIRIAGARI KOTOBUKI / Manga Artist

published_2020.04.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

体のどこかになるとしたら、目になりたい。

もし自分が人間の体のうち、どこかひとつのパーツになるとしたら、行動力もないし、臆病だから、足とか手とか頭でもない。そう考えていくと、やっぱり目かなと思うんです。とにかく世の中を見て、見えるものを描きたい。だとしたら人と同じではなく、裏から見るとか斜めから見るとか、ちょっと違う見方をしたいじゃないですか。そうじゃないと、世の中で目の役割を果たせないから。それで結果的に、こういう作風になったんだと思うんです。自分の性格が違ったら、メッセージをガンガン言う人になったかもしれないし、頭を使って世の中を分析する人になったかもしれないし、もっと手足を使って行動力のある人になったかもしれない。

新聞で『地球防衛家のヒトビト』という漫画を連載していますが、描き方で意識していることがあるとすれば、わかんないことはわかんないままにしておくってことですかね。メディアで何か発信する以上、嘘をついたらいけない。だから自分が信じて、間違いのないと思ったことじゃないと、はっきり言えないんですよ。そう思うと僕の漫画って本当にわかんないだけで、ふんわりしててやばいんだよね（笑）。もうちょっと鋭く切り込めよ自分！って思うし、正直そこはもの足りない。バシッとものを言える人が羨ましかったりもするけど、人はそれぞれ得手不得手があるからね。わかるのが得意な人もいれば、わかんないのを出すのが得意な人もいる。世の中はその組み合わせでできてると思えば、まあ自分ができていることをやるしかないのかな。わからないことに素直すぎる感じもするんだけど。



『地球防衛家のヒトヒト』

朝日新聞の夕刊で 2002 年 4 月から連載している、4 コマ漫画。自称「地球防衛家」の 4 人家族が登場し、ゆるく、鋭く世相を斬る。

朝日新聞出版

新聞の漫画は結構難しくてね。たくさんの方が読むし、しかも別に笑いたくて新聞を読むわけじゃないからね。読者に「この笑いがわかるか!？」なんて挑むものはなかなか描けない。それにもうそこら辺の感覚は、商業誌で描いている若い人にはかなわないですよ。僕がやっているギャグ漫画なんかは、昨日は笑ったけど今日はもう笑えないみたいな消耗していく笑いなので、落語みたいに蓄積してつくり上げていく笑いとは種類が違う。消耗していく笑いは、持って生まれたものを削るようなことだから、そりゃあ若い人のほうがいっぱいある。僕はもうちょっとしか残っていないんだよね(笑)。落語みたいに、もう少し技術の方も頑張ればよかったかな。

" 生きるとか死ぬとか " から生まれる美。

3.11 を経て『あの日からのマンガ』を描いたけど、それ以前から日本はいろんな意味でずるダメになってきていた感があります。だから 3.11 がとどめかなと思ったんだけど、その後も結構しぶとく頑張ってきた。でも今回の新型コロナウイルスで、いよいよやばい気がします。3.11 の時は、足元の地面がいきなりガクッとなくなって、日常が断絶したようなショックがあったけど、今回は一気になくなるっていうより、足元の砂がもろく崩れていくような感じがあって、それはそれで相当やばい。これからもおそらく日本は頑張りが続くんだろうけど、経済的ダメージはかなりのものでしょうね。



『あの日からのマンガ』

東日本大震災のわずか 1 カ月後に雑誌に掲載された作品と、日々変わっていく被災状況と揺れ動く社会を描き続けた、朝日新聞連載の『地球防衛家のヒトヒト』などをまとめた作品。2011 年 7 月に緊急出版されて、大きな話題を呼んだ。

© しりあがり寿 / KADOKAWA

そこは逆に北斎に学ぶっていうとおかしいけど、北斎が亡くなってすぐだけど、その頃も日本でコレラが流行ったんですよ。当時は他にも流行り病はいくらでもあったらうし、生きる死ぬっていうことがもっと身近だったと思うんです。なのに、おたおたしないであんなに膨大に描いていた。だからまあ、昔の人ができたのだから、オレたちもできるはずだよな。

今回の展示でいったら、鴻池朋子さんの《皮綴帳》という作品は、日本刀と、ぶら下がった皮が展示されているんだけど、そもそも刀なんて人を殺す道具だもんね。そこに剥がれた皮があったりして、生きるとか死ぬってということから美みたいなものが出てくるわけじゃないですか。こういう作品を見ると、生きたり死んだりすることをもっと身近に感じないといけないうって思うよね。自分たちは、どこか別の世界のここのように思っちゃってるけど、生死をもう少し身近に感じて、それでもなお描かざるを得ないものを描くべき。あれ……、ちょっと真面目になってきちゃったぞ（笑）。

アイデアを出すのは自由。だけど競争や淘汰は必要。

日本なんかは今まで特に、よくわからないけど未来には理想的な正解みたいなものがあったて、こんなふうには紆余曲折しても、頑張っていたらエスカレーターに乗るみたいに自然とそこへ行けるんだらうなって信じていたところがありますよね。だけど、どっかで変な大統領が出てきたり、民主主義のはずなのに、実際は独裁のほうが多いんじゃないかって思ってしまう各国の状況とかを見ていると、物事はそう簡単ではない。だから本当にもう一回、自分自身に戻るしかない。どっかの誰かが答えを与えてくれることに期待せず、自分が本当にやりたいこととか、いいと思うことの方に進んでみる。その過程ではきっと、摩擦がいっぱいあると思うんです。だけど仲良くばかりしていたらもうダメで、摩擦とかケンカを始めないといけない気がします。僕はもう先が短いから仲良くやるけどね（笑）。若い人は摩擦をして、ケンカして、抗って、残っていかないと。

表現の自由とか何とかっていうけど、たしかにアイデアを出すのは自由だけど、そのアイデアは全部採用されるわけではなく、淘汰されるもの。その淘汰の仕方が、今はぬるい感じがする。アイデアを出すのは絶対的に自由だし、とにかく自由にものを言うべきだと思うんだけど、要するに本当にいいものだけが残っていくための熾烈な競争とか淘汰が、ちゃんとどこかでできてるのか心配なんです。もちろん熾烈ならいいってもんじゃないけど、適切な競争や淘汰を経ているのかなって。そういうふうなと思うこと、ないですか？ コンペで「なんでこれが!？」と思うようなものが選ばれて、きっと大人の事情なんだろうなと勝手に納得してしまったりとか。選挙から入試から就活からみんなそうなんだけど、いろんなものがきちんと選ばれずに、予定調和的になっちゃってる。もっとたくましく戦って、自分の生きる道を勝ち取ってほしいですね。



しりあがり寿 漫画家

SHIRIAGARI KOTOBUKI / Manga Artist

published_2020.04.08 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

本当にほしいものだけを、ほしいと言う。

世界中で好きな都市をあげるとしたら、僕はやっぱり東京です。台南も好きだけど。おいしいものがいっぱいあるから。台南の街というか、屋台が好き（笑）。そんなにいろいろ行っていないけど、アフリカなんかも大地から人がニョキニョキ生えている感じが面白いですよね。あの力強さって何なんだろう。もしかしたらアスファルトで覆っちゃうと、人ってダメなのかもね。人も大地から養分をもらっているのかもしれないって、ああいうところに行くと思います。

東京が好きなのは、知ってる人がいっぱいいるし、おいしいものもいっぱいあるし、安全だから。六本木も好きですよ。昔、会社に勤めていた頃、「ハートランドビール」の仕事をしていました。今は小さくなっちゃったけどテレビ朝日の辺りに毛利家の庭園があって、そこでビアホールとかもやっていたんですけど、いろんなお店が隠れ家みたいに出ては消えていった。当時の六本木は特にそうだけど、ああいう文化は面白いですよね。今日はこっちのお店、明日はあっちのお店ってふらふらして、酔っ払って街を歩いてても平気だしね。最近の六本木は立派になりすぎて、あまり来ないんだよね。自分はひがみ症なので、立派なものを見ると気圧されちゃうというか、疎外感を抱いてしまうんです。だからもっとしょうもないところの方が落ち着くんだけど、頑張ってもっと来ようと思います（笑）。

会社員時代はコマーシャルとかをつくっていたんだけど、コマーシャルってほしくないものまでほしがらせないといけないじゃない？ 極端な話、本当は必要のないものまでほしがらせて、それがなくて不幸せくらいに思わせるのが、コマーシャルじゃないですか。そういう罪な仕事をしていたんだけど、もっとみんな、ほしくないものはほしくないし、本当にほしいものだけをほしって言ったほうがいいんじゃないかな。僕も随分勝手なこと言ってるけど。

「笑かす」ことの難しさ、「笑われる」ことの親しみ。

予算と規模の制約がなかったら、やってみたいのは飲み屋です。ハートランドのビアホールも、ビールが飲めるディズニーランドみたいな場所にしたいよねって話をしていたんです。お酒の力を借りながら、夢なのか現実なのかわかんないような空間をつくりたい。毎年「さるフェス」っていう300～400人規模のイベントを新宿 Loft でやってるんだけど、イメージはこれのもっとすごい版。ビルを全部借り切って、ドアを開けたらそこに何があるのか誰もわかんないような驚きがあったりして、ネットでは絶対に経験できないようなこと。実は前に、ミッドタウンで似たようなのをやったことがあるんだよね。日本文化デザイン会議の総会みたいな集まりで、「しりあがりさん、やりたいことやっていいよ」って言われたから、こっちで漫画の朗読をやって、こっちでデスマタルをやってっていうのを企画したんだけど、ワンフロアだとさすがに無理があった。だって、向こうでやってることが見えるんだもん。音もうるさいし(笑)。でもお金があったら、絶対にできると思うんだよね。ぜひまた六本木でやらせてください。



さるフェス

しりあがりさんの事務所「有限会社さるやまハゲの助」の新年会として開催しているイベント。正式名称「しりあがり寿 presents 新春! (有) さるハゲロックフェスティバル」。複数のステージで多彩なアーティストによるパフォーマンスが同時進行。夕方から深夜にかけて行われる大人のお祭。

Artwork by 天野天街、しりあがり寿

ユーモアとひとことでいっても、「笑われる」のと「笑かす」のって違うじゃないですか。笑かすって結構敷居が高くてさ、こいつ、笑かしにかかっているなってわかった途端、人って身構えちゃうんです。それを越えて笑かすのは、相当の技術が必要だし、笑かしにかかって失敗すると相当みっともないんだよね。笑いはタイミングも含め、いろいろデリケートだから、無理につくろうとしない方が場合によってはよかったです。だからその高いハードルを超えて笑かしてるコメディアンや落語家とか、本当にすごい！ 僕なんかむしろ、笑われちゃう方が簡単だと思って要は隙っていうか、間違っているか、やらかしてる感で生きてきちゃったんだよね。まあ、そっちはそっちでイジメや蔑みと地続きだし難しいねー。

一方笑いは見る方の問題でもあって、同じものを見てもバカだねーってユーモアを感じる人と、けしからんって思う人とがいるわけですよ。でもって「けしからん」と思われるものは「悪いもの」と消しにかかる。「こうじゃないとダメ！」って思っていると、ユーモアはどうしても少なくなってしまう。見る方がユーモアを感じるには、寛容になること。誰か「けしからん笑い」とは社会に有用である、なんて論文書いてくれないかな。

取材を終えて

取材が行われたのは、新型コロナウイルスの影響で展示会のスタートが延期されている最中。大好きなパロディについて語る時も、先が見えない現状について語る時も、しりあがりさんの柔らかな口調が印象的でした。真面目な話題になりかけると、「芸風が違ってきたぞ(笑)」とはぐらかす感じも、まさに作風(芸風?)と一致。「わからないことに素直すぎる」と謙遜するものの、物事を俯瞰して、ゆるさの中に鋭さを忍ばせる様はお見事。これからも世の中の目として、「ちょっと可笑しな」ものの見方で楽しませてください。(text_ikuko hyodo)